

# 日本語学習者を対象とする古典日本語文法テキストの課題 －武漢大学出版社『日本語古典文法』を例として－

春 口 淳 一

The subject of a Classical Japanese Grammar's textbook for Japanese Learner  
-A case study on Wuhan university press "NIHONGO KOTEN BUNPO"-

HARUGUCHI Junichi

## Abstract

The purpose of this paper is to discuss what is the subject of a classical Japanese grammar's textbook for Japanese learner. Especially, I picked up the textbook, Wuhan university press "NIHONGO KOTEN BUNPO". As a result of this study, I show the following five points: 1) It needs to think which age is more usefulness for the learner, and build up limited learning items that suit the age. 2) For the auxiliary verb with plural meanings, it is necessary to present the method to distinguish a meaning. 3) When the learning item is introduced, enough number of example sentences is demanded. 4) The example sentence including the learning item that has not study yet is necessary to be excluded. 5) If a suitable example sentence cannot be prepared qualitatively and quantitatively, it might be also effective to use "Gikobun" (a example sentence that teacher made in classical style, Haruguchi 2006).

## 1. はじめに

高等教育における日本語教育では、現代の日本語文法に限らず古典文法（以下、古典日本語文法）もまた教科として取り上げられることがある。特に中国においては数多くの大学で開講されており、例えば復旦大学（湯 1989）、北京第二外語学院（鈴木 1991）、華僑大学（間・岡崎 2003）のカリキュラムにその存在を見出すことができる。さらには長崎外国語大学（以下、本学）の提携校である吉林大学、厦門大学、首都師範大学、台湾の淡江大学など枚挙に暇がない。さらに、これら協定校からの要望に応え、2008年度からは本学でも短期留学生を対象とする「古典日本語文法 A / B」を開講している。

### 1. 1 先行研究

従来、非母語話者向けの古典日本語文法教育を対象とした先行研究は非常に限定される。その先駆けとしては立松（2000）、金山（2004）が挙げられるが、これらはおよそ授業報告として位置づけられるものである。

このような状況下において、春口（2006）ではアンケート調査を基に、学習者のモチベーションを高めるための試みを取りまとめた。そしてその結果を基に、文法項目の定着に擬古文（教師の自作による例文）が有効であることを提唱した。また春口（2007）では、古典日本語を現代語訳する際にみられるミステイクを分類・分析し、その特徴を5つに取りまとめるとともに、現代日本語能力が

古典日本語の学習に密接に関わっていることを指摘した<sup>1</sup>。さらに春口(2008)は学習者が持つ古典日本語文法観と彼らに要求される知識とを分析し、主たる分析結果を5つ挙げた<sup>2</sup>。

## 1. 2 研究目的

春口(2008)での分析対象は問題集であった。これは到達目標を図る上で有益であろうが、学習のプロセスを支えるテキストの分析もまた欠かすことのできない分析対象である。非母語話者が学習の拠り所とするテキストは、いったいどのようなものであろうか。

一方、上記の先行研究を振り返ったとき、特に注目すべき品詞は助動詞であろう。春口(2007)ではミスイクの最大の要因の一つとして助動詞を挙げ、また春口(2008)でも試験問題中の最頻出項目として助動詞を取り上げた。このような状況を踏まえ、本研究では助動詞に限って分析を行う。

そこで、本研究の掲げる研究目的として以下の3点を提示する。

- 中国で出版される古典日本語文法のテキストは、助動詞をどのように、どこまで学習者に提示するのか。
- この点に関して、日本で出版される同様のテキストと相違点はあるのか。
- 例文については、非母語話者であることへの配慮などがなされているのか。

以上を明らかにすることで、古典日本語文法テキストが日本語非母語話者を対象とした時、何に留意しているのか、また改善すべき点があるとすればそれは何か言及したい。

## 2. 調査概要

### 2.1 調査対象

今回、調査の対象として取り上げるのは武汉大学出版の『日本語古典文法』<sup>3</sup>である。筆者は中国の複数の書店(北京・大連・長春)の店頭に並んでいることをすでに確認しており、一般的なテキストの1つであろうと考えたからである。またその端書きに「海外日本語学習者の『古語』の力を伸ばすための一助となれば幸い」とあり、日本語非母語話者を対象としていることが汲み取れる。

また比較対象としては、明治書院の『精選古典文法』<sup>4</sup>改訂版(以下、『精選』)を採択する。これ

<sup>1</sup> 1) 学習者は、古典日本語を現代日本語に訳すに際して、数多くのミスイクを犯す。2) ミスイクは、古典日本語に関するもの、現代日本語に関するもの、敬意表現に関するものに大別でき、さらにそれぞれ複数の下位項目に分類できる。3) 助動詞に関するミスイクが、非常に多い。その一因として、助動詞が訳出の対象であることの認識が不十分であることが挙げられる。4) 古文の理解に注意が偏り、産出時に初歩的なミスイクを犯しがちとなる。5) 専らミクロ的な視点で翻訳するために、中途であるにもかかわらず訳出を終えてしまう。

<sup>2</sup> 1) 学習者の半数は古典文学の読解などを学習目的に挙げる。しかし必然性に懐疑的な学生も多く、モチベーションの低い受講生も少なくない。2) その理由として「生活・仕事で生かせない」など実用的ではないとの考えが多く挙げられる。3) 既習知識を持って受講する学習者はおらず、ごく基礎的な知識を求める学習者が多い。4) 「日語専業八級考試」模擬試験問題集では、延べ167語(109項目)の理解を問うているが、そのうち助動詞が延べ53語(17項目)、助詞が延べ26語(14項目)でもっとも出題頻度が高い。ほぼすべての項目が古語辞書で最重要項目に指定されている。また重複して使用される項目の割合も高い。5) それ以外の品詞の頻度は延べ88語と助動詞・助詞の合計に等しいが、項目は78と多岐に渡る。またこのうち最重要語として位置づけられない語が約7割を占める。

<sup>3</sup> 王雪松編(2005)『日本語古典文法』武汉大学出版社

<sup>4</sup> 稲沢好章・浅田孝紀・窪谷徹・皆河洋(1999)『精選古典文法 改訂版』明治書院

はそのはしがきにおいて、対象とするレベルと目標とする学習効果が明示されており、上記『日本語古典文法』の位置付けを測るための基準を提供してくれることが期待できるからである。以下に、端書きを一部引用して紹介する。

本書は、高等学校における古文読解学習の展開に即応した、実際的な読解文法として役立つとともに、将来の受験古文の勉強につなげられるだけの、知識の整理と演習とができる文法教科書を目指して編集した。文法の学習は、体系的な理論や知識の習得を目標としたものでなく、古文読解にかかわる言葉の決まりを、日本語の文法体系に即して理解し、整理するものである（以下、略）。

## 2.2 調査方法

まず『日本語古典文法』と『精選』とが助動詞をどう扱っているのか、テキスト構成上の相違を確認する（3. テキスト構成）。どの助動詞を紹介し、その説明がどこにまで及んでいるのか概観する。

次に、各助動詞を導入する際に用いられる例文を取り上げ、『日本語古典文法』で扱う例文は日本語学習者にとって適当であるのか考察する（4. 例文）。どのような例文をいくつ学習者に提示しているのか、例文の出典に特徴はあるか、使用する例文に問題はないのか、実際の例文を対象に分析を行う。

## 3. テキスト構成

### 3.1 『日本語古典文法』

助動詞を紹介するに当たって、このテキストでは「活用のある付属語 一助動詞」として独立した章を設けている（pp.42-69）。その構成は、まず「一 助動詞とは」で品詞としての助動詞の特性について述べ、「二 助動詞の分類」で意味、接続、活用語との分類を表の形で提示している。そして「三 助動詞のいろいろ」で具体的に助動詞を一つ一つ取り上げて説明している。助動詞の提出順は、表1の通りである（次頁。助動詞の左隣に示す番号で提出順を表した）。

表1：助動詞提出順『日本語古典文法』

1	使役・尊敬の助動詞 す・さす・しむ	11	推量の助動詞 まし
2	自発・可能・受身・尊敬の助動詞る・らる	12	推量の助動詞 めり
3	打消の助動詞 ず	13	推量の助動詞 べし
4	過去の助動詞 き・けり	14	打消推量の助動詞 じ
5	完了の助動詞 つ・ぬ	15	打消推量の助動詞 まじ
6	完了の助動詞 たり・り	16	推定・伝聞の助動詞 なり
7	推量の助動詞 む(ん)・むず(んず)	17	希望の助動詞 まほし・たし
8	推量の助動詞 けむ(けん)	18	比況の助動詞 ごとし
9	推量の助動詞 らむ(らん)	19	断定の助動詞 なり・たり
10	推量の助動詞 らし	20	奈良時代の助動詞ゆ・らゆ・す・ふ・ましじ

各助動詞は活用、接続、意味の順で紹介している。活用は基本形と活用形（未然形、連用形、終止形、連体形、已然形、命令形）、そして活用の型（動詞ラ行変格活用型、形容詞ナリ活用型など、用言に類した活用の種類があれば提示、なければ特別型と表記される）で1つの表を作成して提示している。意味の紹介では、例文とその出典、現代語訳を載せている。助動詞2、3語ごとに練習問題も用意している。

表1を見れば分かるように、助動詞によっては複数をまとめて紹介したものがある。また意味（学習すべき項目）を2つ以上有する助動詞もある。このテキストで紹介された助動詞は33語、設定された学習項目は54であった。

またいくつかの助動詞については、以下の補足事項を設けてもいる。

- 「き」と「けり」の違い
- 「つ・ぬ」と「たり・り」
- 「たり・り」の成り立ち
- 「む」「むず」の意味の見分け方
- 「むず」の成り立ち
- (タイトルなし…「けむ」と疑問語の関連性を紹介)
- (タイトルなし…「らむ」と疑問語の関連性を紹介)
- 「む」「けむ」「らむ」の違い
- (タイトルなし…「らし」の意味である推定の推量との違いを紹介)
- (タイトルなし…「まし」が反実仮想となる場合を紹介)
- 「べし」の意味の見分け方
- 「べし」の音便
- 「む」と「じ」
- 「べし」と「まじ」
- 「まじ」の音便
- 「まほし」「たし」の音便

### 3.2 『精選古典文法 改訂版』

こちらのテキストでは「第三章 助動詞」として独立した章を設けて、助動詞を扱っている(pp.40-71)。また構成も「三 各助動詞の解説」に先立ち、「一 助動詞の性質」で品詞として特性を述べ、「二 助動詞の種類」で意味ごとの分類を表の形で提示している（接続による分類、活用の型による分類も欄外に掲載）。助動詞の提出順は、『日本語古典文法』を示した表1と同様に、表2にまとめた。

表2：助動詞の提出順『精選古典文法 改訂版』

1	自発・可能・受身・尊敬の助動詞 る・らる	11	推量の助動詞 らむ（らん）
2	使役・尊敬の助動詞 す・さす・しむ	12	推量の助動詞 らし
3	打消の助動詞 ず	13	推量の助動詞 めり
4	過去の助動詞 き	14	推量の助動詞 べし
5	過去の助動詞 けり	15	打消推量の助動詞 じ
6	完了の助動詞 つ・ぬ	16	打消推量の助動詞 まじ
7	完了の助動詞 たり・り	17	希望の助動詞 まほし・たし
8	推量の助動詞 む（ん）・むず（んず）	18	推定・伝聞の助動詞 なり
9	推量の助動詞 まし	19	断定の助動詞 なり・たり
10	推量の助動詞 けむ（けん）	20	比況の助動詞 ごとし（+ごとくなり）

各助動詞の紹介が活用、接続、意味の順であり、活用が基本形、活用形、活用の型で1つの表にまとめられる点は『日本語古典文法』と同じである。意味の紹介では例文とその出典、現代語訳を載せているが、現代語訳を欄外に赤字で示している点は異なる。助動詞2、3語ごとに練習問題を用意し、章の終わりには「まとめの演習」として総復習用の問題も設けている。このテキストでは、29の助動詞、49の学習項目が設けられている。

「識別のために」と題したコラムが9箇所見られるが、これは複数の意味を持つ助動詞の意味の見分け方（例えば、助動詞「す」が使役になる条件など）を解説している。

さらに「助動詞補説」として、最後に「助動詞の音便」と「上代（奈良時代）の助動詞」を簡略に紹介している。「助動詞の音便」ではイ音便、ウ音便、撥音便の3つを、「上代（奈良時代）の助動詞」では「ゆ・らゆ」「す」「ふ」の4つを取り上げている。

また欄外には例文の現代語訳の他、助動詞の成り立ちや表記、覚える際の手がかりをまとめた「記憶のポイント」など補足説明が充実している。欄外補足事項のタイトルは、次の通りである。

- 接続による分類
- 活用の型による分類
- 助動詞・助詞の「意味」と「現代語訳」
- 「る」「らる」の意味
- 記憶のポイント（「る」「らる」）
- 「す」「さす」「しむ」の用法
- 「す」「さす」「しむ」と動詞の語尾
- 記憶のポイント（「り」の接続の問題）
- 「む」と「ん」の表記
- 「むず」について
- 「む」「けむ」「らむ」の基本的意味
- 原因推量「らむ」
- 「らし」の連体形と已然形
- ラ変型活用語＋「らし」
- 「めり」の意味
- 「めり」の前の撥音表記
- 「べらなり」について
- 記憶のポイント（「べし」と人称）
- 記憶のポイント（「まじ」と「べし」）
- 「む」「べし」じまじ
- 「打消」と「否定」
- 「ず」の活用の三系列
- 「き」の力変、サ変への接続
- 「けり」の未然形「けら」
- 「つ」と「ぬ」の違い
- 並列の「つ」と「ぬ」
- 「たり」「り」の由来
- 「まくほし」から「まほし」へ
- 「まほし」と「たし」
- 形容詞の「あらまほし」
- 「なり」の前の撥音表記
- 断定の「なり」「たり」の語源
- 「なり」の存在の意味
- 「たり」は漢文訓読語
- 「ごと」の用法
- 比況の助動詞「やうなり」
- 「ゆ」「らゆ」の活用と例
- 「す」の活用と例
- 「ふ」の活用と例

### 3. 3 考察

『日本語古典文法』も『精選』も、助動詞を独立した章で扱っており、重要視していることが伺える。章の構成も概ね似通っており、取り上げる学習項目もほとんど共通していることから、『日本語古典文法』が想定するレベルは、日本の高校国語とほぼ同等であることがわかる。

助動詞の提出順には若干の違いが見られる。しかし、例えば「む(ん)・むず(んず)」をまず紹介した上で、推量の助動詞各種を紹介するなど、助動詞間の関連性に着目して配列している点は共通している。

相違点としては、上代の助動詞を『精選』がコラムでのみ取り上げているのに対し、『日本語古典文法』では他の助動詞と同様に扱われていることが挙げられる。学習項目数は『古典日本語文法』の53に対し、『精選』は50であるが、この差は主としてこのような上代の助動詞の扱いの相違に求められるだろう。このため『精選』に比して、『日本語古典文法』を使用する学習者の負担は大きいといえる。例文のほとんどは中古以降の文学作品から抽出されており(4.2参照)、上代の助動詞を学習項目に挙げることは疑問である。

補足説明は質量ともに『精選』が充実している。このうち、「記憶のポイント」に見られるように学習の促進と定着に寄与する事項は、日本語非母語話者を対象とするテキストでも有用であろう。一方で、語源や語形変化の解説などは入門段階にあって導入すべき学習項目であるかは疑問である。

#### 4. 『日本語古典文法』の提示する例文

##### 4. 1 例文数

『日本語古典文法』にみられる助動詞、学習項目ごとの例文数を表にまとめた(次頁、表3)。原則として助動詞、学習項目ごとに1文ずつ例文は紹介されている。助動詞「す・さす・しむ」を例に挙げると、学習項目「使役」は「す」「さす」「しむ」が1文ずつで例文数3となる。

表3：例文数『日本語古典文法』

助動詞	学習項目	例文数	助動詞	学習項目	例文数
す・さす・しむ	使役	3	めり	推定	1
	尊敬	3		婉曲	1
る・らる	自発	2	べし (べらなり)	推量	1
	可能	2		意志	1
	受身	2		当然・適当	1
	尊敬	2		可能	1
ず	打消	2		命令・勧誘	1
				打消の推量	1
き・けり	過去	2	じ	打消の意志	1
	詠嘆	1		打消の推量	1
つ・ぬ	完了	2	まじ	打消の意志	1
	確認・強調	2		打消の当然・不適當	1
	並列	2		不可能	1
たり・り	存続	2		禁止	1
	完了	2			

助動詞	学習項目	例文数	助動詞	学習項目	例文数
む(ん)・ むず(んず)	推量	2	なり	推定	1
	意志	2		伝聞	1
	勧誘・適当	2	まほし・たし	希望	2
	仮定・婉曲	2	ごとし	比況	1
現在推量	1	例示		1	
らむ(らん)	現在の原因・理由推量	1	なり・たり	断定	2
	現在の伝聞・婉曲	1		存在	1
	過去推量	1		自発	1
けむ	過去の原因・理由推量	1	ゆ・らゆ	可能	1
	過去の伝聞・婉曲	1		受身	1
	推定	1		尊敬	1
らし	推定	1	す	尊敬	1
まし	半実仮想	1	ふ	反復・継続	1
	意志・希望	1	ましじ	打消推量	1
	単純な推量	1	計		76

例外に「ず」の2例があるが、これは活用のパターンごと(「ず」系、「ざり系」)に1文ずつ紹介している。一方、「き・けり」のうち、詠嘆が1例であるのは、これに該当するのが「けり」のみだからである。これは「なり・たり」の学習項目である存在も同様である(存在は「なり」のみ)。「ゆ・らゆ」は学習項目ごとにどちらか1例を紹介するのみであり(自発、受身が「ゆ」、可能が「らゆ」、これまでの原則に当てはまらない)。

#### 4.2 出典

例文は全て古典文学作品から抽出したものである。時代区分は、上代(奈良時代)、中古(平安時代)、中世(鎌倉・室町時代)に三分できる。表4に時代区分、出典作品名と例文の数をまとめた。

表4：例文の出典

時代区分	出典作品名	例文数	時代区分	出典作品名	例文数
上代	万葉集	7	中古	土佐日記	4
中古	伊勢物語	3	中古	枕草子	8
中古	宇治拾遺物語	1	中世	源平盛衰記	1
中古	大鏡	4	中世	新古今集	1
中古	源氏物語	5	中世	太平記	1
中古	古今集	4	中世	徒然草	14
中古	今昔物語集	1	中世	平家物語	11
中古	更級日記	3	中世	保元物語	1
中古	竹取物語	6	中世	方丈記	1

出典は全部で18作品に分けられ、中古と中世におよそ大別できる(上代7例、中古39例、中世30例)。中古文学が比率の上では高いものの、最頻出が『徒然草』の14例であり、次いで平家物語

11 例と中世文学が続く。一方、文学のジャンルに目を移せば、『徒然草』同様に随筆の『枕草子』が 8 例と多用されるのも特徴であろう。

#### 4.3 問題点

『日本語古典文法』で紹介される例文を観察したとき、いくつかの問題点を指摘することができる。1 つは表記上のミスであり、もう 1 つは未習語彙・文型の使用である。

##### 4.3.1 表記上のミス

表記上のミスは、以下に挙げる 7 例で確認できた（次頁、表 5）。全体の 9%、およそ 1 割に及ぶ。誤りを紹介するに当たり、訂正文<sup>5</sup>も併記する（文に付与した番号は、補足資料に掲げた例文一覧に基づく。訂正文はこれに「<sup>^</sup>」を加えて示す。また誤りのある語、文節には筆者が下線を引いた）。

表 5：表記上のミス

26	怪しがりて、寄りて見る <u>と</u> に、筒の中光たり
26 <sup>^</sup>	怪しがりて、寄りて見るに、筒の中光たり
31	この月の十五日に、かのもとの国より、迎へに人々まうで <u>こ来</u> むず
31 <sup>^</sup>	この月の十五日に、かのもとの国より、迎へに人々まうで来むず
36	<u>思はむ</u> を法師になしたらむこそ、心苦しけれ
36 <sup>^</sup>	思はむ子を法師になしたらむこそ、心来るしけれ
51	我が命のあらむかぎりは、とぶらひ <u>奉</u> たてまつるべし
51 <sup>^</sup>	我が命のあらむかぎりは、とぶらひ奉るべし
54	<u>より頼</u> とも朝が首をはねて、わが墓の前にかくべし
54 <sup>^</sup>	頼朝が首をはねて、わが墓の前にかくべし
62	「火危ふし」と言ふ言ふ、預かりが曹司の方に <u>い去ぬ</u> なり
62 <sup>^</sup>	「火危ふし」と言ふ言ふ、預かりが曹司の方に去ぬなり
75	<u>天あめ地</u> とともに久しく住まはむと
75 <sup>^</sup>	天地とともに久しく住まはむと

表 5 の例文番号 26 は助詞の添加、36 は語の欠落であるが、それぞれ引用する際の誤記であろう。例文番号 31、51、54、62、75 は漢字の振り仮名をそのまま文中に織り交ぜてしまったための誤りである。いずれもケアレスミスである。しかし、前後の文脈のない一文のみの引用であるため、学習

<sup>5</sup> 訂正文は以下の書籍、インターネット・ホームページより提示した。

桑原博史監修（1990）『新明解古典シリーズ 4 枕草子』三省堂

桑原博史監修（1990）『新明解古典シリーズ 5 源氏物語』三省堂

桑原博史監修（1990）『新明解古典シリーズ 9 平家物語』三省堂

インターネット・ホームページ『万葉集検索 ver1.01』

[http://www.inf.edu.yamaguchi-u.ac.jp/MANYOU/manyou\\_kensaku.html](http://www.inf.edu.yamaguchi-u.ac.jp/MANYOU/manyou_kensaku.html)

インターネット・ホームページ『太平記国民文庫本全巻』

<http://www.j-texts.com/sheet/thkm.html>

者が誤りを指摘するには文学作品やその時代背景に関する知識など必要であり、容易なことではない。インプットが学習項目につき1文のみであることを考えれば、このミスが与えるであろう影響を見逃すことはできない。

#### 4.3.2 未習項目の使用

以下の例文は、助動詞「しむ」導入のためのものである。『日本語古典文法』において、「しむ」は「す」「さす」とともに一番最初に導入されている。

例文番号3 我負けて、人を喜ばしめんと思はば、さらに遊びの興なかるべし

しかし、この文中には未習の学習項目である助動詞「む(ん)」と「べし」が含まれる。その上、『日本語古典文法』では助動詞の後に導入される助詞「ば」や副詞「さらに」も見られる。「遊び」や「興」も現代日本語とは異なる古語であることを考えると、「しむ」導入のための例文として適当であるかは疑問である。

このような問題はこの一文に限ったことではない。助動詞のみに限定しても、未習項目を含む例文は20例(例文番号2、3、4、8、9、10、11、13、14、15、16、18、19、20、21、22、23、29、32、42、59)と全体の26%に及ぶ。特に初期に未習項目の使用が集中するのは、知識量を思えば当然であろう。しかし、学習者にとって分からないことだらけの例文が学習の初めの段階に数多く用いられることは、モチベーション維持の観点から危惧すべきだと考える。

#### 4.4 考察

『日本語古典文法』は、原則として1つの学習項目の導入に、例文は1つだけ用いていた。同様に中国で出版される初級(現代)日本語総合テキストの『日語精読』<sup>6</sup>が、1項目に2例以上を用いていることを思えば、『日本語古典文法』のインプットは量的に甚だ不足している。

古典日本語文法を学習する最大の目的は古典文学の講読であろうが、『日本語古典文法』では専ら中古・中世文学を対象としているように思われる。近世・近代文学は1例も見られない。一橋大学留学生センターは「19世紀後半から20世紀前半までの約百年間に用いられた文語文」を学習するための留学生対象の日本語教科書<sup>7</sup>を作成しているが、社会学系の大学院を擁する一橋大学では、近代に絞ったテキストの意義は高い。学習者に即したテキストのあり方の好例だと言えよう。一方、上代文学からの抽出例文と上代に用いられた助動詞の関係から、上代の助動詞はその時代でのみ使用された特殊なものであると位置付けられる。補足事項として扱った『精選』<sup>8</sup>を踏まえ、入門段階での学習項目に掲げることが再考してもよいだろう。

<sup>6</sup> 宿久高・周異夫編(2006)『日語精読 第一冊』外語教学与研究出版社

<sup>7</sup> 松岡弘編(2001)『学術日本語の基礎(二)近代文語文を読む』一橋大学学術日本語シリーズ7、一橋大学留学生センター

<sup>8</sup> 例文の量的に不足する点(1項目につき、例は1つか2つ)、出典作品の時代区分上の偏りがある点(上代1作品、中古11作品、中世5作品。近世、近代からの出典はなし)、例文中に未習項目が使用される点は『日本語古典文法』と共通している。

助動詞導入のための例文でありながら、その後の学習項目に挙げられている助動詞を多用している点も問題視すべきだ。これでは、理解、定着は覚束ない。先に挙げた量的な問題とともに、言語習得のためには理解可能なインプットを十分受けることが欠かせないとする Krashen (1982) の The Input Hypothesis に全く反した例文だと言える。また例文に誤りもみられる。多くはタイプミスが原因と思われるが、量的に限定されるインプットに誤りがあっては、その役割を果たしているとは言えない。

## 5. おわりに

### 5. 1 まとめ

中国人日本語学習者を対象とする『日本語古典文法』であるが、その構成は日本の高校生を対象とする『精選』と大差は無く、用いられる例文にも日本語非母語話者であることへの配慮はみられなかった。学習者の理解促進、モチベーション向上の点から、日本語非母語話者のために古典日本語文法テキストが留意すべき事項として以下の5点を挙げ、まとめとしたい。

1. 学習者にとってより必然性の高い時代区分がないか吟味するとともに、それに即した限定的な学習項目を打ち立てる。
2. 複数の意味を持つ助動詞の場合、その識別方法を提示する。
3. 学習項目導入時の例文数を充実させる。
4. 未習項目を含む例文は排除する。
5. 質的、量的に適切な例文を確保できないならば、教師自作の擬古文（春口 2006）の活用も検討すべきである。

### 5. 2 今後の課題

本研究は『日本語古典文法』を研究対象の主とするケース・スタディである。よって、研究目的の更なる解明のためには、他のテキストにも同様の調査・分析を行う必要がある。また本研究では、テキストの問題点を指摘したが、実際にこれを用いる教師、そして学生はどのように評価しているのかなど、ミクロレベルでの研究課題も多い。さらに教育現場への応用を考えたとき、問題点を改善したテキストの作成もまた取り組むべき課題と言える。

補足資料：助動詞例文一覧①（※誤用も原文のままとした。以下②、③も同様）

助動詞	意味	No.	例 文	出 典
す さす しむ	使役	1	かれに、物食はせよ	宇治拾遺物語
		2	月の都の人まうで来ば、捕へさせむ	竹取物語
		3	我負けて、人を喜ばしめんと思はば、さらに遊びの興なかるべし	徒然草
	尊敬	4	上も笑はせ給ふ	枕草子
		5	御身は疲れさせ給ひて候ふ	平家物語
		6	公も、行幸せしめ給ふ	大鏡
る らる	自発	7	名を聞くより、やがて面影は押しはからるる心地するを、	徒然草
		8	人知れぬ思ひ出で、笑ひもせられ、	源氏物語
	可能	9	涙のこぼるるに、目も見えず、ものも言はれず	伊勢物語
		10	湯水ものどへ入れられず	平家物語
	受身	11	すべて男をば、女に笑はれぬやうに生ほし立つべしと	徒然草
		12	ありがたきもの 舅にほめらるる婿	枕草子
	尊敬	13	かの大納言は、いづれの船にか乗らるべき	大鏡
		14	大井の土民に仰せて、水車を作らせられけり	徒然草
ず	打消	15	京には見えぬ鳥なれば、みな人見知らず	伊勢物語
		16	風激しく吹きて、静かならざりし夜、	方丈記
き けり	過去	17	京より下りし時、み那人子どもなかりき	土佐日記
		18	今の妻の失せにければ、京に送りてけり	今昔物語集
	詠嘆	19	見渡せば 柳桜を こきまぜて 都ぞ春の 錦なりける	古今集
つ ぬ	完了	20	問ひつめられて、え答えずなり侍りつ	徒然草
		21	いみじく短き夜の明けぬるに、つゆ寝ずなりぬ	枕草子
	確認 強調	22	たちひ五、六十日雨降らずともこらえつべし	太平記
		23	黒き雲にはかに出で来ぬ。風吹きぬべし	土佐日記
	並列	24	泣きぬ笑ひぬし給ひける	平家物語
25		組んづ組まれつ、討ちつ討たれつ	源平盛衰記	
たり り	存続	26	怪しがりて、寄りて見るとに、筒の中光たり	竹取物語
		27	富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降れり	伊勢物語
	完了	28	その間に佐々木は、つと馳せ抜いて川へぎつとぞうち入れたる	平家物語
		29	富士川といふは、富士の山より落ちたる水なり	更級日記

補足資料：助動詞例文一覧②

助動詞	意味	No.	例 文	出 典
む むず	推量	30	この獅子の立ちやう、いとめづらし。深き故あらん	徒然草
		31	この月の十五日に、かのもとの国より、迎へに人々まうでこ来むず	竹取物語
	意志	32	いとをかしげなる猫なり。飼はむ	更級日記
		33	秋風の吹かむをりにぞ来むずる。待てよ	枕草子
	勧誘 適当	34	とくこそ試みさせ給はめ	源氏物語
		35	近習の人々に、「いかがせんずるぞ」と、常に御談合ありけり	保元物語
	仮定 婉曲	36	思はむを法師になしたらむこそ、心苦しけれ	枕草子
37		さる所へまからむずるも、いみじくも侍らず	竹取物語	
けむ	過去推量	38	五年六年のうちに千年や過ぎにけむ	土佐日記
	過去の原因 ・理由推量	39	見渡せば 山もとかすむ 水無瀬川 夕べは秋となに思ひけむ	新古今集
	過去の伝聞 ・婉曲	40	増賀ひじりの言ひけんやうに、	徒然草
らむ	現在推量	41	億良らは いまはまからむ 子泣くらむ それその母も わを待つらむぞ	万葉集
	現在の原因 ・理由推量	42	いつのまに 五月来ぬらむ あしひきの やまほととぎす 今ぞ鳴くなる	古今集
	過去の伝聞 ・婉曲	43	鸚鵡、いとあはれなり。人の言ふらむことをまねぶらむよ	枕草子
らし	推定	44	春過ぎて 夏来たるらし 白妙の 衣干したり 天の香具山	万葉集
まし	半実仮想	45	鏡に色、形あらましかば、うつらざらまし	徒然草
	意志 希望	46	しやせまし、せずやあらましと思ふことは、大様はせぬはよきなり	徒然草
	単純な推量	47	うららかに言ひ聞かせたらんは、おとなしく聞こえなまし	徒然草
めり	推定	48	あはれにいひ語らひて泣くめれど、涙落つとも見えず	大鏡
	婉曲	49	いまひときは心も浮き立つものは、春の気色にこそあめれ	平家物語
べし	推量	50	黒き雲、にはかに出できぬ。風吹きぬべし <sup>9</sup> (※例文 23 と重複する)	土佐日記
	意志	51	我が命のあらむかぎりは、とぶらひ奉たてまつるべし	平家物語
	当然・適当	52	家の作りやうは夏をむねとすべし	徒然草
	可能	53	日入り果てて、風の音、蟲の音など、はた言ふべきにあらず	枕草子
	命令・勧誘	54	より頼とも朝が首をはねて、わが墓の前にかくべし	平家物語

## 補足資料：助動詞例文一覧③

助動詞	意味	No.	例 文	出 典
じ	打消の推量	55	一生の恥、これに過ぐるはあらじ	竹取物語
	打消の意志	56	打たれじ、と用意して、	枕草子
まじ	打消の推量	57	冬枯れの気色こそ、秋にはをさをさ劣るまじけれ	徒然草
	打消の意志	58	我が身は女なりとも、敵の手にはかかるまじ	平家物語
	打消の当然・不適當	59	妻といふものこそ、男の持つまじきものなれ	徒然草
	不可能	60	心のいたりすくなからむ絵師は、かき及ぶまじと見ゆ	源氏物語
	禁止	61	おろかにもてなし給ふまじ	源氏物語
なり	推定	62	「火危ふし」と言ふ言ふ、預かりが曹司の方にい去ぬなり	源氏物語
	伝聞	63	聞けば、侍従の大納言の御女なくなり給ひぬなり	更級日記
まほしたし	希望	64	言葉多からぬこそ、飽かず向かはまほしけれ	徒然草
		65	敵に会うてこそ死にたけれ。悪所に落ちては死にたからず	平家物語
ごとし	比況	66	ただ春の夜の夢のごとし	平家物語
	例示	67	楊貴妃ごときは、あまり時めきすぎて悲しきことあり	大鏡
なりたり	断定	68	よき方の風なり	竹取物語
		69	いにしへ、清盛公いまだ安芸の守たりし時、	平家物語
	存在	70	春日なる三笠の山にいでし月かも	古今集
ゆらゆ	自発	71	近江の海 夕波千鳥 汝が鳴けば 心もしのに いにしへ思ほゆ	万葉集
	可能	72	ほととぎす いたくな鳴きそ 独り居て 寝の寝らえぬに 聞けば苦しも	万葉集
	受身	73	吾はほとほとあざむかえつるかも	古今集
す	尊敬	74	この丘に菜摘ます児家聞かな名告らさね	万葉集
ふ	反復・継続	75	天あめ地とともに久しく住まはむと、	万葉集
ましじ	打消推量	76	恋の増さらばありかつましじ	万葉集

---

参考文献

- 金山泰子(2004)「上級学習者のための文語文法入門」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』27、アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター、41 - 62 頁
- 間英・岡崎智己(2003)「華僑大学における日本語教育－中国における学部生日本語教育課程を考える－」『九州大学留学生センター紀要』13、九州大学、1 - 10 頁
- 鈴木宣行(1991)「北京第二外国語学院における実践的外語教育－日本語学科の学習指導を通して－」『創価大学別科紀要』5、創価大学、23 - 51 頁
- 立松喜久子(2000)「文語文法を教える 外国人上級者のための古典入門授業」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』23、アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター、1 - 24 頁
- 湯麗敏(1989)「中国復旦大学国際政治学部における日本語の教育」『創価大学別科紀要』4、創価大学、72 - 77 頁
- 春口淳一(2006)「非母語話者を対象とした古典文法授業の実践報告－学習者のモチベーション向上を目指した取り組み－」『中国日语教育理论与实践研究』吉林大学出版、56 - 66 頁
- 春口淳一(2007)「非母語話者が古典日本語文法を学習する際の問題点－現代日本語訳におけるミステイク分析から－」『長崎外大論叢』11、長崎外国語大学・長崎外国語短期大学、109 - 122 頁
- 春口淳一(2008)「日本語学習者と古典日本語文法－学習者が求めるもの・学習者に求められるもの－」日本語教育学会第2回研究集会発表資料
- Krashen,S.D. (1982) *Principles and practice in second language acquisition*. Pergamon.